

## 水の恩人 矢延平六

### 伝説の主人公になった水利開発の功労者「矢延平六」

#### ■ 矢延平六(やのべ へいろく)1610年から1685年

矢延平六は、西嶋八兵衛と並び称される讃岐の水利開発の功労者ですが、西嶋八兵衛が家老と肩を並べるほどの地位であったのに比べ、平六は下級武士に過ぎず、経歴については記録があまり残されていません。常陸下館(ひたちしもだて)(現在の茨城県)藩主松平頼重に仕え、寛永19年(1642年)に讃岐高松藩主となった頼重にしたがって高松にやってきました。

平六は土木技術に優れ、郡奉行配下の技術者として数々の土木工事に専念しました。干ばつによる飢饉の後、頼重が水利開発に力を入れたことにもなって、平六も各地のため池の普請に力を注ぎ、百余りのため池を築いたと言われています。ほかにも土器川の上流に掛井手を造って水を引いたり、高松藩の水道を手がけたり、讃岐の水利開発に力を尽くしました。ところが、新池の改築に関して、必要以上に池を広げたとしてとがめられ藩を追放されてしまいました。その後、高松藩に戻ることができ、晩年は富熊村(現在の丸亀市綾歌町富熊)に住み、貞享2年(1685年)に74歳でなくなりました。平六の業績や人柄は後々までも語り継がれ、今も民話や伝説として残っています。高松市香川町浅野の高塚山にある新池神社(池宮さん)の「ひょうげまつり」は、平六の恩に報い後世に伝えるための一風変わったまつりで、旧暦の8月3日に近い日曜日に毎年開催されています。

